

短 報

長期臨床実習期間中に設けた登校日の意義とあり方について — 理学療法学専攻学生の意見を基に —

Significance and modality of establishing the school attendance day during long-term — A study based on the Student's opinion —

藤平 保茂¹⁾ 久利 彩子¹⁾

要約： 本学における長期臨床実習期間中に設けた登校日の意義とあり方、その内容の検討を行うため、長期実習を終了した直後の理学療法学専攻4年生学生40名を対象に、調査を行った。その結果、登校日に出席したほとんどの学生が、クラスメイトに会えたことが良かった、と回答した。一方、登校日に出席したものの、当日の内容が好ましくなかったことや担当教員に相談できなかったこと、その時間の有効利用を優先したかったこと等を理由に、否定的な意見を回答した学生もいた。学生にとって中間登校日は、クラスメイトと教員に会うことができる機会であり、不安や悩みを和らげリフレッシュすることができる意味で有意義であると考えられた。教員は、個別面談の機会を設け、相談内容をしっかり受け入れること、適切な指導をより具体的に行うことで、学生にとって意義のある登校日にすることができ、さらに学生のコーピングを支援することができるものと考えられた。

Key Words： 臨床実習、登校日、意義、学生の意見、支援、コーピング

1 はじめに

臨床実習（以下、実習）は、理学療法士を目指す学生にとって臨床での理学療法を経験できる重要な学外授業であり、810時間以上（18単位）を受けなければならない必須科目である¹⁾。医療機関で実習に臨む学生は、臨床実習指導者

（以下、指導者）の指導のもと、症例の担当や症例に関する指導者への報告、連絡、他職種との関わりや連携など、さまざまな経験を通して人間性と社会性、医療専門職としての知識や技術を身に付けながら成長していく。このように、学生にとって実習は教育上多くの効果をもたらすことも予測できるものであるが、半面、実習中にさまざまなストレスが発生することを予測できる。実習期間中に経験するストレスに関する調査では、大城ら（2007）の理学療法専攻学生の臨床実習中のストレス状況に対する調査²⁾

Yasushige Fujihira
大阪河崎リハビリテーション大学
リハビリテーション学部 理学療法学専攻
E-mail : fujihiray@kawasakigakuen.ac.jp
1) リハビリテーション学部 理学療法学専攻

や坂田ら（1999）の4年制大学の教育実習生に対する研究³⁾、望木（2007）の保育専攻学生に対する調査⁴⁾があり、実習中に体験するストレスには対人関係に関するものが多いことが報告されている。望木（2008）は、実習生が実習中のこれらのストレスに対してどのような対処を行うかが、実習を有意義なものとするかどうかの重要なポイントである⁵⁾、と述べている。

さて、大阪河崎リハビリテーション大学（以下、本学）では、3年次および4年次にそれぞれ8週間の長期実習を実施している。学生は基本的にひとりで実習に臨むため、さまざまなストレスを体験するであろう。そこで教員は、実習前から自身が担当する実習施設の指導者とこまめに連絡を取る形で、学生への修学支援を行っている。また、実習が始まると実習訪問を実施する。これは、指導者からの学生の実習状況や内容、目標への到達度に対する情報を基に実習期間中に実施するもので、指導者から学生の実習内容に対する評価を聞き、学生との面談を実施している。面談では、学生にとってその後の実習がより円滑に実施できるようなアドバイスをしよう心掛け支援している。さらに本学では、長期実習期間中に「中間登校日（以下、登校日）」と名付けた登校日を設けており、実習中の学生を本学に戻し、状況を確認し、面談を実施する機会を持っている。とは言え、学生への修学支援と考えながらも教員主導型で実施している登校日は、はたして学生のためになっているのだろうか、かえってストレスになってはいないだろうか、という疑問が湧く。

そこで本研究では、実習の主体である学生の考えや意見を基に、長期臨床実習中に設けた登校日の意義と在り方について検討、考察することを目的とする。また、ストレスに対処することをコーピングというが、登校日が、学生のコーピングの支援に役立つものなのかを検討

することとする。

2 登校日について

2.1 中間登校日のねらい

教員が考える中間登校日のねらいは、教員が担当学生の現状を把握すること、学生自身に自己の問題点や課題、実習中での経験や指導者から受けた指導内容を整理させること、慣れた学び舎にて心身をリフレッシュさせることである。

2.2 中間登校日についての指導者および学生への事前説明

実習開始前に、指導者に対し登校日の日程と目的を説明したうえで、「原則として、実習優先でご指導をお願いします。登校日は、必ず出席するものではありません。登校日である土曜日が指導者の勤務日である場合、学生の実習の進捗状況や課題の質量、能力、または指導者の勤務状況に応じて、登校日への参加を容認してください。」と説明し、登校日の理解を求めた。学生に対しては実習前のガイダンスを通し、「原則として、実習への参加を優先とします。指導者が、あなたの実習の進捗状況や課題の質量、能力、または指導者の勤務状況をみて、実習に参加の方が望ましいかどうかを判断されます。指示に従ってください。実習がない場合は9時に登校するようにしてください。」と指導した。

2.3 対象となる登校日の概要

対象となる登校日は、実習開始第4週目の土曜日であった。

理学療法士教員10名のうち、登校日に出席した教員は6名、午後から出勤した教員は2名、欠席した教員は2名であった。

当日のタイムスケジュールとして、9時から

一同を集合させる全体会、その後、各教員による個別面談を実施した。面談までの空き時間は自由行動とし、個別面談終了後は、自由解散とした。全体会では、約45分をかけて、出欠確認と全体での担当症例に関する質疑応答や情報交換を行った。その後、各教員が自身の研究室を中心に、個別面談を実施した。教員の中には、個別面談を実施する前に担当学生数名を集め、グループ指導する教員もいた。個別面談を待っている学生は、本学の図書館を利用したり、クラスメイトと情報交換に利用したりしていた。

3 方法

3.1 調査票

調査票は、筆者らが作成したものを使用した(資料)。調査での質問項目は3つで、「中間登校日に登校しましたか(2項択一回答形式)」、「登校日に来て良かったと思いましたが(3項択一回答形式)」、「前問に対し、何故そう思いましたか。または、中間登校日に出席しなかった場合、その理由を記載してください(自由回答形式)」であった。

3.2 対象

本研究は、本学の倫理委員会規則に従い承認(承認番号OKRU231107)を受けたもので、調査にあたっては、対象者に本研究の主旨を説明

し同意を得た者にのみ、匿名で回答を求めた。

調査対象は、4年次長期実習を終えた学生で、本研究に同意を得た40名の学生、男性20名、女性20名であった。この長期実習は、本学の「平成23年度4年次臨床総合実習Ⅱ」であり、期間は平成23年6月6日からの8週間であった。また、中間登校日は、実習開始第4週目の土曜日であった。

なお、調査日は、実習終了後初の登校第1日目に実施した。

3.3 集計および分析方法

出欠状況と感想について得られた回答に対し、記述統計を行った。また、自由回答にて得られた回答をキーワード化し、川喜田が開発した分析法で多様な質的データの分類のみならず検索的にデータ構造を把握できる特徴を持っているKJ法⁶⁾を用いてカテゴリーに分類した。

4 結果

登校日に出席した学生は40名中32名(全体の80%)で、欠席した学生は8名(20%)であった(図1)。登校日の感想として、登校日に出席した学生で、「良かった」と回答した学生は22名(68.8%)、「どちらでもない」と回答した学生は9名(28.1%)、「良くなかった」と回答した学生は1名(3.1%)であった(図2)。

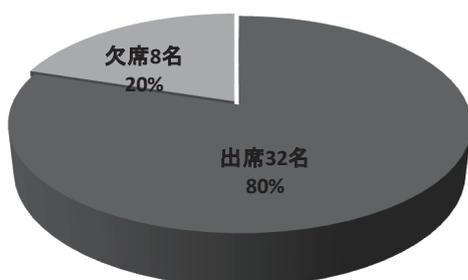


図1 登校日の出欠状況

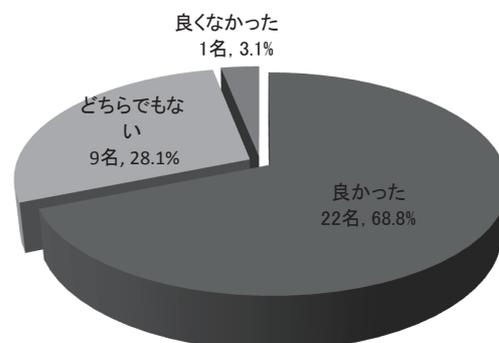


図2 登校日の感想

表1 登校日への出欠とその感想、および理由

	問1	問2	問3
1	はい	はい	みんなに会えるし、中間登校日でなかったら学校に来ていなかったと思います。ちょうど半分終わったと思えたし、先生にがんばるように言われて、残り半分がんばろうと思えました。
2	はい	はい	みんなの顔が見れて安心できた。担任教員に相談できて良かった。
3	はい	はい	他の学生がどの程度実習を進めているかなどの情報を収集することができ、他の学生と関わることで気持ちのリフレッシュができた。実習担当の先生と話をすることで、自分の課題を認識し、後の取り組みに活かせた。
4	はい	はい	久しぶりに学校の友達と会えたから。良い気分転換になった。前半の1ヶ月は中間登校日を楽しみに頑張った。
5	はい	はい	他の学生の顔や状況の確認、実習後の連絡、国試の模試、実習後報告会の日程や会場などもこの時点でわかれば知りたかった。
6	はい	はい	先生に相談できて困っていることが聞けて実習中の悩みが少し解決できたので良かった。また、友達に会えて安心できた。
7	はい	はい	同じ状況の友達と会うことにより、気持ちを落ち着かせることができた。また自分と同じ担当症例の人が居れば、どんなことをしているなどの相談ができ、自分が悩んでいることなども聞いてもらえた。
8	はい	はい	他の学生たちと会えると落ち着きました。また先生方のお話を聞くと悩みが少し解決しました。
9	はい	はい	みんなと会えてほっとしました。気分転換になりました。土曜日、実習があるので休みになって少しうれしかった。
10	はい	はい	1ヶ月ぶりにクラスメイトと会え、気持ちが落ち着いた。様々なアドバイスをもらうことが出来た。
11	はい	はい	担当の先生に相談をしたり、友達に相談することが出来てよかったです。ただ、時間を分けて学校に行っても、すぐに終わってしまうので午後からにしてもう少しゆっくり行えたらいいと思います。
12	はい	はい	学生同士で実習の経過などを話すことができ、気分のリフレッシュになった。
13	はい	はい	友人に久々に会うことができ、気休めになった。精神的に少し楽になった。中間登校日は自由参加でいいと思う。
14	はい	はい	1ヶ月ぶりに友人と会い、意見交換や近況報告をし合うことができ、気分転換ができました。また、先生と直接会い、相談をすることができたので良かったです。
15	はい	はい	実習の半ばで気が緩みがちな時期に中間登校日があり、先生方のお話を聞くことでまた気持ちのリセットができたと思います。学生間での情報の共用も出来たので、私は必要と思います。
16	はい	はい	臨床実習で頑張っている仲間の顔が見れたことです。
17	はい	はい	友達との情報交換や気持ちのリセット
18	はい	はい	図書館で調べものが行えたから、友達と会って話すことが楽しかったから、土曜日にも実習がある施設は、この日だけ学校に行く機会をくれるので行って良かったと思います。
19	はい	はい	周りの学生の情報を聞いた。分からないことを友人に聞いた。本来土曜日は実習だったが、中間登校日のおかげで実習の休みをもらえ、体を休めることができた。
20	はい	はい	先生に実習中に困っていたことを相談できた。実習中の今の様子をメールではなく直接伝えることが出来た。伝えることで実習が順調に進んでいるのか把握できた。友達と会うことで情報交換ができた。実習中の出来事を話し合ったり、当時の症例に対する悩みに対して一緒に考えたりすることができた。また、登校日の後、少し息抜きでお昼をみんなで食べに行ったりして元気になった。残りの1ヶ月も頑張ろうって思えた日だった。
21	はい	はい	他の学生の取り組みや実習で学んだことを言い合い、その後の実習へとつながったから。
22	はい	はい	卒論のデータが取れたから。
23	はい	どちらでもない	あまり情報交換しなかった。まわりとの能力の差を実感してあせることがあった。通学するだけで疲れた。時間が短くてすぐ終わってしまった。

24	はい	どちらでもない	先生の都合によっては個別相談がない学生がいた。他の先生に相談したところアドバイスをくださり今後の実習に生かすことができました。他の病院ではどのようなリハビリが行われているのか他の学生と情報交換ができました。学校までの定期券が切れていたため、車での通学を認めて欲しいです。
25	はい	どちらでもない	学生同士で情報交換をすることができた。先生と話すことができた。しかし、担当の先生と話す機会がなかった。
26	はい	どちらでもない	学生同士の実習の考え方や進捗を聞くことができたのは良かった。ただ、休みの日に朝早く起きて来るだけの内容ではなかったと思う。
27	はい	どちらでもない	中間登校日は来たけど、みんながいまどういう状況なのか？どんな事をしているのか？ということあまり聞きたくなかったから行くか迷ったが行った。行ったけど、実習の話はほとんどしていない。仲良い友達に久しぶりに会えて、普通の話をして残りがんばろうと励ましあえたのは良かった。
28	はい	どちらでもない	久しぶりに友達の顔を見て安心できました。前回の集まりの時、特に何も話をしなかったの、今回は来なかったです。来ないことでゆっくり寝れました。でも、昼から来て先生と話せたのは良かったです。
29	はい	どちらでもない	他の学生と情報交換できたことで気持ちが楽になったが、その時間でもっと学習できたのではないと思うから。
30	はい	どちらでもない	友達に会えたのは良かった。悩んでいることを相談したのに、実習に対する意欲が下がることを言われてしんどかった。
31	はい	どちらでもない	友達の顔を見て良い気分転換になった。でも、今後の実習に役立ったかといえばそうではないと思う。朝が早い、2限目がよいと思う。
32	はい	いいえ	友人に会える点ではいいが、実習地に先生が来てくださって2日後だったので、担当教員との話がなかったため来ても意味が感じられなかった。
33	いいえ	—	課題が多く、終わりそうになかったから。寝不足が続いていたので少し休みたかった。
34	いいえ	—	レポートに追われていた。
35	いいえ	—	遠方の実習地に行っていたため、移動だけで時間がかかったから来れなかった。体を休める時間が取れて良かった。友人や先生の顔を久しぶりに見たかった。
36	いいえ	—	実習へ行っていたため。実習の進行状況や実習地などによって登校日の良し悪しは変わると思う。自由参加という形で登校日を設けたら良いと思う。
37	いいえ	—	土曜日に実習があったので登校できなかった。
38	いいえ	—	土曜日の午前中は実習へ参加していたため、中間登校日へは参加出来ませんでした。
39	いいえ	—	コメントなし
40	いいえ	—	コメントなし

表2 自由記載に対するカテゴリー分類

出席して良かった理由
『クラスメートに会うことができる』
『教員に相談できる』
『実習を休むことができる』
『その他』
出席して良くなかった理由
『内容が良くない』
『時間が欲しい』
『その他』
欠席理由
『時間が欲しい』
『環境』

登校日に参加した感想とその理由を、表1に示した。また、自由記載での回答に対し行ったKJ法でのカテゴリー分類を『 』内に示し、表2に整理した。

4.1 出席への感想とその理由

出席した学生が「良かった」と回答した理由として、32人中30人(出席者全体の93.8%)が『クラスメイトに会うことができる』こととし、32名中12名(全体の37.5%)が『教員に相談できる』ことと回答している。また、他の理由として、『実習を休むことができる』、『その他』と回答した。『クラスメイトに会うことができる』と回答した学生は、その理由を、「不安な気持ちを落ち着かせることができた」、「担当症例に関する情報交換ができた」、「自分が悩んでいること等の相談ができた」、「気持ちのリフレッシュができた」、「気分転換ができた」などと回答した。また、『教員に相談できる』と回答した学生は、その理由を、「相談することができた」、「自分の課題を認識し、後の取り組みに活かすことができた」、「アドバイスをもらうことができた」、「頑張るよう励まされた」などと回答した。『実習を休むことができる』、『その他』と回答した学生は、その理由を、「登校日のおかげで実習の休みをもらえ、体を休めることができた」、「実習の半ばで気が緩みがちな時期に登校日があり、気持ちのリセットができた」、「前半の1ヶ月は登校日を楽しみに頑張った」、「残りの実習を頑張ろうと思うことができた」、「登校日でなければ学校に戻る機会がなかった」などと回答した。

一方、「どちらでもない」、「良くなかった」と答えた学生から、その理由として、『内容が良くない』、『時間が欲しい』、『その他』があった。『内容が良くない』と回答した学生は、その理由として、「時間をかけて学校に行ってもすぐに終わってしまった」、「休みの日に朝早く起きて来るだけの内容ではなかった」、「悩んでいることを相談したのに、実習に対する意欲が下がることを言われた」、「実習に役立つ内容ではなかった」などと回答した。『時間が欲しい』と回答した学生は、「その時間でもっと学習で

きたのではないか」、「朝が早い」、「通学するだけで疲れた」などと回答した。『その他』では、「実習の進行状況や実習地などによって登校日の良し悪しは変わる」などと回答した。しかし、出席に対する否定的な感想を抱いた学生であっても、10人中10人(出席者全体の100%)が『クラスメイトに会うことができる』と回答し、10名中3名(出席者全体の30%)が『教員に相談できる』と回答した。

4.2 欠席理由

欠席理由として、『時間が欲しい』、『環境』があった。『時間が欲しい』と回答した学生は、その理由を、「課題が多く、レポートを仕上げられそうになかったから」、「寝不足が続いていたので少し休みたかったから」と回答し、『環境』と回答した学生は、その理由を、「登校日が実習日であったため」、「遠方の実習地であったため出席できなかった」と回答した。『時間が欲しい』と回答した学生は8名中3名(欠席者全体の37.5%)で、『環境』と回答した学生は8名中3名(欠席者全体の37.5%)であった(図3)。

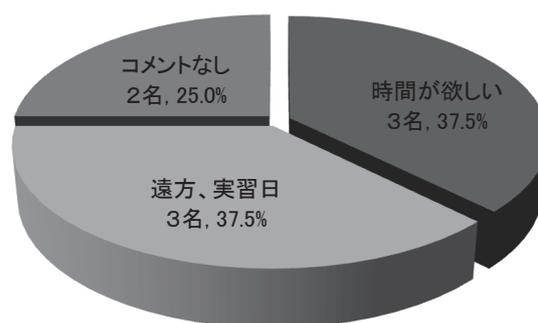


図3 欠席理由

5 考察

5.1 登校日の意義について

登校日に出席して良かったとする意見から、

クラスメイトや教員と会うことができること、会話や相談を通して安心感を得ること、不安の解消や励みとなること、今後の実習へのより強い動機付けとなること、そして、登校日を後半へのターニングポイントと位置付けていた学生がいたことが伺えた。また、教員が抱く登校日へのねらいに沿う学生の意見を確認できたことで、登校日の意義が、一部、学生に理解されていることが伺えた。さらに、登校日に出席したがその内容に十分な満足感を持たない学生がいたにも関わらず、彼らの全員がクラスメイトに会うことができることを支持し、加えて教員に相談できることを良い点とした。したがって、実習では、ほとんどの学生がさまざまなストレスを感じながら孤軍奮闘しているものとみなせる。不慣れな実習地で、しかも指導者や他のスタッフ、担当患者とのコミュニケーションが十分取れていない状況の中で不安感を解消できる相談者もいず、理学療法を修学する目標の中で出てきた自分の問題点や課題を持ちながら自分自身を見つめ、打開策を考え実践している状況であることを想定すると、学生にとって登校日は、一種の心身の安堵の場、リフレッシュの場、エネルギーを取り戻す場であり、有意義なものであると考えられた。また、学内での学生の様子を伺う機会を得た教員にとっても、有意義な機会であると考えられた。

反対に、登校日が実習日であったため、遠方の実習地であったためなどの実習地の環境に関する要因を除く登校日に出席したが良くなかったとする意見、登校日に欠席した意見から、時間を有効利用したい、体を休めたいと考える学生がいた。登校日に出席しないで体を休めて良かったという意見を合わせると、大多数の学生が実習中に睡眠不足に陥り、ストレス耐性が低くなっている可能性が高いと思われる。自己都合とも考えられる理由ではあるが、登校日を理由に実習を休むことで疲れた心身を休ませるこ

とができるこのような機会は、ストレスサーに対するコーピングとなるものと考えられ、学生にとって有意義なものであると考えられた。ただし、教員にとって学生の状況把握の機会を失うので、登校日と実習訪問日との調整やあり方、内容の検討が、今後の課題と考えられる。

5.2 登校日のあり方、内容について

登校日に出席したが十分な満足感を抱かなかった否定的な意見から、登校日の内容を充実させること、当日の開始時間を含めたタイムスケジュールを工夫することなどの改善すべき点が確認できた。

5.2.1 担当教員との面談機会を設定する

教員は、学生との面談を通し、対象学生からの相談内容に応じた対応を充実させることが重要と考えられた。具体的には、学生間で談話する時間を確保しつつ、教員との個別面談の時間を保障することが重要である。特に個別面談では、今後何をすれば良いのかわからない不安や困惑状態にある学生には、学生自身に自己の問題点や課題、実習中での経験や指導者から受けた指導内容を整理し理解させること、課題の克服のために今後の対応策をより具体化させて指導することが必須であろう。

また、「悩んでいることを相談したにも関わらず実習への意欲が低下した」という意見から、指導内容が不十分であると登校日の意義が薄れるばかりではなく、かえって学生の不安や負担を増強させる恐れがある。相談を受ける教員は、学生の悩みの根源は何なのかをしっかりと評価し、的確な指導が必須であることを忘れてはならない。

5.2.2 学生の様子を的確に把握する

教員は、面談の機会を持ってはじめて、学

生の不安や相談に傾聴、共感し、激励し、今後の課題を整理、明確化することで教員としての指導の役割を果たすことができる。しかし、学生の意見（表1. 問3の23番、27番）から、教員のみならず、クラスメイトに対しても、自分の実習の話題に触れることに苦痛を感じていると考えられる学生がいた。このことから、顕著なストレスがあることが伺える。教員は、このような相談すらできない学生をいかに見つけ出し、個別指導の機会に繋げていくかが今後の課題となる。また、学生への行動観察や表情観察技量を向上させることが重要である。

5.2.3 実習訪問日と登校日の調整をする

「実習訪問2日後だったので担当教員との話がなかった。そのため登校日に出席しても意味が感じられなかった」という意見から、実習訪問との調整が必要であることがわかった。教員が学生にとって有益と考えている登校日、実習訪問の日程が近過ぎると、学生にとって意義が薄れ、かえって負担になると考えられる。

実習訪問日と登校日の機能分けを考察すると、実習に出た自己課題に対する学習方法や克服方法などの悩みや不安、その他の実習中に起こった悩みや不安など、教員への質問を通して指導を受けることが望ましいと思われるものへの対応は、直接教員と面談を通して解消することが良いだろう。このような場合、登校日の個別面談や実習訪問での個別面談が適している。一方、普段一人である環境が一変し、一時期であれクラスメイトに会うことができることで不安の解消に役立ち、リフレッシュすることができる機会は、登校日が適しているであろう。つまり、実習訪問は課題の克服を支援する機会であり、登校日はクラスメイトと会えることを最大限に活かした

リフレッシュの機会であろうと考えられる。

また、学生の持つ課題や不安、悩みなどを解決できる手段として登校日を設けることを前提とするならば、期限付きの課題が残っている場合や、寝不足のために心身を休ませたいと考えている学生には、登校日を理由に実習を休暇日とすることも、悪くはないかも知れない。1日の休暇日を設けることで今後の実習がより良いものになるのであれば、登校日を大義名分にして休暇をとることは、ストレスが大きくなっていると思われる学生にとっては許されるべき理由なのかも知れない。そういう意味でも中間登校日は、有意義であるものと考えられる。

実習訪問のメリットを活かしつつ、内容と開始時間を工夫することで、中間登校日の意義がさらに高まるであろう。

6 結語

今回の調査にて、登校日のあり方と内容を検討するための貴重な資料を得ることができた。また、学生の意見を集計することで、以下のことがわかった。

- (1) 学生にとって中間登校日は、クラスメイトや教員に会うことができる機会、相談できる機会であり、不安や悩みを和らげリフレッシュすることができる意味で、非常に有意義であること。
- (2) 教員が抱く中間登校日の意義が、学生にも理解されていること。
- (3) 中間登校日は、強制で出席させることで得られる学生にとってのメリットもあるが、反対に学生への負担にもなり得ること。登校日の内容が乏しいと、無駄になること。
- (4) 登校日に対する学生の満足感を満たすためには、個別面談の機会を設け、相談内容をしっかりと受け入れること、適切な指導

を行うことが重要であること。

- (5) 実習訪問日と近すぎないように登校日を調整することで、より有意義なものにすることができること。

おわりに

実習中の学生は、今まで経験したことがない緊張感と責任感の中で実習を行っていることは容易に想像できる。そのため、今まで経験したことがないストレスを受けているであろう。そのような中で不安や自信喪失感が強くなった学生から相談を受けた場合、教員は、本人から話す内容を肯定的な姿勢で傾聴することから始めることが良いのかも知れない。そして、実習中に積もった不安感を回復させ、自信を取り戻させるために、受容的態度と支持的態度を基本とし、受身的、中立的態度を持って相談に応じ7)、彼らの今までの努力と苦悩を認め、時には、成功例を褒めることを優先することも必要になる。学生からの個別的な相談に対する支援をも合わせて実施することで、学生のための登校日とすることができるものと考え。そして、登校日のあり方を再考し、内容を工夫し、各学生の問題に適した指導をすることで、学生の持つストレスに対するコーピングを支援する役割を担うことができるものと考え。

[文献]

- 1) 医療六法編集委員会編：理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則. 平成22年度 医療六法, 2010, p.1599.
- 2) 大城昌平、水地千尋、重森健太 他 理学療法専攻学生の臨床実習とストレス. 聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部紀要 2007, 第3号：1-7.
- 3) 坂田成輝、音山若穂、古屋健 教育実習生のストレスに関する一研究. 教育心理学研究 1999, 47：335 - 345.
- 4) 望木郁代 教育実習が保育専攻短大生のコーピング、自己効力感、達成動機に及ぼす影響. 高田短期大学紀要 2007, 第25号：99-109.
- 5) 望木郁代 教育実習生の教育向上に関する研究. 高田短期大学紀要 2008, 第26号：111-118.
- 6) 川喜田二郎 “続・発想法 KJ法の展開と応用” 中公新書, 東京, 2004, p.56-72.
- 7) 馬場謙一、橘玲子 “カウンセリング概説” 放送大学教材, 東京, 2002, p.49 - 50.